

五、おわりに——さらなる問いへ

最後に、本書の研究方法が堅実で精細であればこそ湧いてくる新たな問いに触れたい。

本書にも述べられているように、内村は「日本的基督教の形成を指そうとした」(二三三頁)日本人キリスト者の嚆矢である。しかし、その「日本の基督教」の〈源流〉たる日本の「伝統」(二二〇頁)とは何から何までを指すのだろうか。

あらためてそのように考えるとき、内村が不敬事件で世間から突きつけられたものも、また彼自身の倫理観として生涯保たれた〈武士〉の自覚も、死の床で慰められたという紀貫之の歌(第五章)も、いずれも〈日本〉や〈伝統〉に連なるものでありながら、それらの内実は同じではなく、時には対立するものであることに思い至る。

おそらく内村に関わる〈日本〉や〈伝統〉は今後さらに詳細に分析・整理される必要があるのでろう。本書の研究とその方法は、このような方面の内村研究に先鞭をつけたという意義をももっているのではないだろうか。

(聖心女子大学教授)

望月詩史著

『石橋湛山の〈問い〉』 ——日本の針路をめぐって』

(法律文化社・二〇二〇年)

武藤 秀太郎

本書は、一般に「小日本主義」の提唱者として知られる石橋湛山(一八八四—一九七三)の思想について、多角的に考察・再検討をこころみたまものである。筆者である望月詩史がこれまでとりこんできた石橋湛山研究を一書にまとめたものであり、同志社大学に提出した博士論文「石橋湛山の政治思想——思考方法から読み解く」が原型となっている。第三章に収録された論文がもつとも早く二〇〇八年に書かれており、十年以上におよぶ筆者の石橋湛山研究の集大成といえよう。

「序章」の整理にしたがえば、石橋湛山研究史は、(一)長幸男や松尾尊発、鹿野政直らにより、大正デモクラシーのフロントランナーたる「急進的自由主義」者としての湛山像がえがかれた一九六〇〜七〇年代の第一段階、(二)大正デモクラシー期にとどまらず、湛山の思想を生涯にわたり総合的に評価するとともに、湛山の「小日本主義」にスポットがあてられた増田弘や姜克實に代表される一九八〇〜九〇年代の第二段階、(三)二〇〇〇年代以降の第三段階と、大きく三つに区分できるといえる。第三

段階の動向はさらに、①明治期から昭和戦前期までの「アジア主義」や日蓮思想、東洋経済新報社の経営に関わる湛山研究、②政治家や立正大学学長としての戦後の湛山研究、③第二段階で定着した「小日本主義」の適否をめぐる研究、の三つに分類されている。

第三段階に研究をはじめた望月は、はじめに湛山の天皇・皇室論をテーマとし、その後日蓮論、文化論、思考方法にとりくみ、最終的に一九三四年に東洋経済新報社から創刊された英文雑誌 *The Oriental Economist* の研究へといたった。これら一連の研究は重要であるにもかかわらず、先行研究では見落とされていたり、掘り下げられなかったりしていた。これを疑問に思った望月が、その理由をさぐった結果、「小日本主義」概念の問題や分析ツールとしての妥当性を検討する必要があると考えるにいたったという。「小日本主義」はそもそも、湛山の思想を分析する枠組みとして有効性をもたない。この見地にたつて、本書では湛山の思想が考察されている。

本論は全五章からなり、第一・二章の「第一部 思考方法と哲学」、第三・四章の「第二部 二つの〈問い〉」、第五章の「第三部 *The Oriental Economist* 研究」の三部に、それぞれ分かれている。以下、その概要をみてゆきたい。

第一章「宗教論」では、湛山の思考方法に影響を与えた宗教として、日蓮とキリスト教がとりあげられている。湛山は身延山久遠寺の第八一法主をつとめた父をもち、少年・青年時代を

日蓮宗僧の望月日謙のもとですごした。おのずと宗祖日蓮に対する敬愛の念は強く、生涯を通じて日蓮に言及している。中でも、湛山が座右の銘としたのが、「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず」と説いた『開目抄』の一節であった。

甲府中学校在学中にキリスト教にふれた湛山は、将来「宗教家」になろうとまで考えた。

『東洋経済新報』の社説でも、たびたび『新約聖書』を引用していた。たとえば、一九二一年のワシントン会議の際には、「汝等のうち大ならんと欲う者は、汝等に使わるる者となるべし、また汝等のうち頭たらんと欲う者は、汝等の僕となるべし」というマタイオスによる福音を引き、日本政府の態度として「一切を棄つる覚悟」をよびかけた。

本書の見立てによれば、湛山の思考方法の特徴づける「国民的使命観」に日蓮、「道徳的使命観」にキリスト教の影響が、それぞれ確認できるといえる。湛山は日蓮やキリスト教から日本人がどうあるべきかという教訓をくみとる一方、両宗教の教義そのものには関心をもたなかった。湛山の宗教観には、早稲田大学時代の恩師であるプラグマティスト・田中王堂からの感化も小さくないとされる。

第二章「進化論とプラグマティズム」は、これまで見過ごされてきた湛山の「真」を追求する思考にスポットをあてている。ここでいう「真」とは、「日本人の『生活の方法』として有効

性をもつもの」を意味する。先行研究が重視したプラグマティズムを基盤とする「欲望統整」哲学は、進化論を通じ、この「真」を追求する思考と結びついていたという。

生活との結びつきを説く「欲望統整」哲学は、もともと田中王堂が構築したものである。王堂の「倫理学」講義をうけた湛山が「初めて人生を見る目を開かれた」と述べているように、その影響は大きかった。本書が着目するのは、この「欲望統整」哲学とともに、進化論が湛山に受容された点である。

ただ、湛山は進化論をそのまま受け入れたわけではなく、「社会ダーウィニズム」に批判的な姿勢をとっていた。社会進化論や有機体説をみとめつつも、進化に一定の基準があると考えた。この基準とは、「生活の方法」として有効性をもつか否かであり、もっていれば「真」となる。「真」は一定不変でなく、状況に応じ変化するとされる。

望月は、こうした湛山の「真」を追求する思考が「日本的視角に根ざしていたことを指摘する。これは第一章でふれた「国民的使命観」と「道徳的使命観」にも通ずるものであった。これまで曖昧に解釈されてきた湛山の愛国心について、その言論活動をたぬく支柱であったと結論づけられている。

第三章「国内政治論」では、湛山の天皇・皇室論と議会政治論が考察されている。湛山は天皇を立憲君主とみなし、その存在意義について国民の政治的感情をまとめる最上の政治機関である点に見出した。また、皇室が国民感情を統一させる代表的

存在であり、国民の崇拜をうける対象であると認識した。湛山がこうした天皇・皇室観を一貫して保持していたとし、戦後に共和制を志向したとする姜克實らの見解をしりぞけている。

湛山は一九一〇年代より主権が国民全体にあると主張するとともに、それが天皇・皇室の存在と矛盾しないと考えた。その上で、矛盾を生じさせないために、政党政治にもとづく議院内閣制の確立と非立憲勢力の排除をうったえた。湛山がいち早く男女普通選挙論を唱え、貴族院や枢密院の廃止を求めたのも、立憲代議政体の実現をめざしたからだとされる。天皇は君主無答責の原則のもと、立憲君主としてふるまうことが期待された。

湛山というと、終戦直後に靖国神社の廃止を主張したことで知られる。ただ、望月によれば、この廃止論に天皇・皇室を否定する意図はなかったという。湛山は天皇・皇室の本質が平和主義にあるととらえ、天皇を軍人の象徴として祭り上げる靖国神社を問題視したのであった。また、戦後の湛山には、天皇へ内閣に注意を与える権限をもたせようという従来と異なった提案がみられる。これは、あくまで当時の岸信介総理による強権政治に向けられたもので、一時的な発言にすぎなかったとされる。

第四章「対外論」では、湛山の対外論が再検討されている。第一章のおよそ四倍にあたる八五頁と、他の章と比べ多くの分量が割かれている。望月が長年の湛山研究を通じ、痛感するにいたった「小日本主義」概念をめぐる問題を、真正面からとり

あげた本書のメインとなる章である。

「小日本主義」は東洋経済新報社第四代主幹であった三浦鏡太郎により、「領土の拡張に反対し、保護政策に反対し、主として内地の改善、個人の自由と活動力との増進によって、国利民福の増進せんとするもの」と定義されている。さきにふれた湛山研究史の第三段階以降、湛山の対外論はこの「小日本主義」の枠組みにもとづき、一貫していたか否かが問われてきた。とくに、当問題へ大きな一石を投じたのが、上田美和『石橋湛山論——言論と行動』（二〇一二年）である。上田は湛山が一九三〇年代半ばにいたり、台湾・朝鮮・樺太を日本の領土の一部とみなす発言をおこなっている事実などを挙げ、「小日本主義」からの逸脱を指摘した。

これに対し、望月は石橋の対外論が「境遇」に応じ、「目標」とされる世界像を修正しているために変化が生じていると主張する。「小日本主義」の一貫性を説く者も、変化を強調する者も、湛山が日本人の生活に大きな関心を寄せていたことを見落としている。これは、第二章で論じられた湛山の「真」を追求する思考に通ずるものであろう。そもそも、湛山の思想を分析する枠組みとして「小日本主義」は適切でなく、その定義の一部である「国利民福の増進」だけが妥当性をもつとされる。

第五章「*The Oriental Economist* 創刊とその時代」は、文字通り *The Oriental Economist* (以下OE誌) を考察対象としている。OE誌に関する研究は二〇一〇年代に入るまで、ほと

んど手つかずであった。その理由としては、OE誌に掲載された記事の多くが『東洋経済新報』の英訳であったことや、現存資料の少なさが挙げられる。旧版の『石橋湛山全集』全一五巻にも、湛山がOE誌に発表した文章は収録されなかった。しかし、英文で書かれたOE誌では、読者層の違いを念頭に置き、さまざまな工夫がこらされていた。本章ではそうした見地から、一九三四年から三七年にわたるOE誌創刊初期の全体像がサベイされている。

評者にとって興味深かったのは、OE誌を創刊するにいたった経緯である。湛山は戦後、OE誌を刊行した目的について「ひとえに世界のすべての国家の軍備放棄を実現することを世界に訴えたいためであった」と語っていた。この回顧談に対し、望月は当時の資料を引きつつ、湛山の意図が何よりも、為替ダビング批判など、諸外国の日本に対する誤解を解く点にあったことを論証している。ここにも、湛山における愛国心の発露をみとめることができよう。

以上、本論の内容をみてきたが、湛山研究の門外漢である評者が、はたして内容をどれだけの確に把握できているかは、はなはだ心もとない。それはともかく、本書は紛れもなく、石橋湛山の新たな全体像を描こうと試みた大作であり、今後の湛山研究における一里塚となるであろう。湛山研究者のみならず、広く近代日本思想史研究者にも一読をすすめたい。最後に二点ほど愚見を述べ、書評の責めをふさぐこととする。

一点目は、本書のメインテーマにあたる「小日本主義」に関する点である。評者はかつて、さきにあれた上田美和『石橋湛山論』を読み、湛山の戦前・戦中・戦後を通じた思想の核心が自立主義と経済合理主義にあり、「小日本主義」が戦間期にこの二つの主義が交差した一つのバリエーションにすぎないという明快な主張に刺激をうけた。この上田本に対する感情的といえる反論の書評も、強く印象に残っている。

本書はこうした先行研究をうけつつ、「小日本主義」の一貫性を唱える者も、その逸脱を指摘する者も、湛山が日本人の「生活」に関心をもっていた点を看過していたとし、分析する枠組みとして「小日本主義」の有効性を否定する。ただ、これは評者の読解不足かもしれないが、先行研究がこの日本人の「生活」に対する湛山の関心を無視しているというのは、正直なところよく飲み込めなかった部分がある。また、一九一〇年代から二〇年代初めにおける湛山の植民地放棄論について、「日本および日本人の世界における名誉を向上させる方法の一つと考えたからである（実際は「心構え」としての性格が強い）」と解釈しているが（一九二頁）、はたしてそういえるか、も疑問に残った。湛山は自由主義と経済合理主義の立場から、本気で植民地放棄を唱えた面があったのではなからうか。

二点目は、湛山の昭和恐慌論についてである。日経・経済図書文化賞を受賞するなど、話題となった岩田規久男編『昭和恐慌の研究』（二〇〇四年）は、金解禁論争において新平価解禁を

説くとともに、デフレ脱却の必要性をうったえた湛山の言動を再評価している。この編著者である岩田や著者の若田部昌澄がその後日本銀行副総裁となり、金融政策の一端を担っていることは周知のところである。最近も、著者の一人であり、日本銀行政策委員会審議委員をつとめた原田泰が、和田みき子と共著で『石橋湛山の経済政策思想——経済分析の帰結としての自由主義、民主主義、平和主義』（二〇二二年）を公刊している。昨今のリフレ政策において、湛山の昭和恐慌論が大きな論拠の一つとなっているのはまちがいない。

これは政治思想に焦点をあてた本書の内容と直接関連をもたないため、研究史の第三段階に含めなかったのかもしれない。ただ、湛山の昭和恐慌論は今日の金融政策に通ずる、最もアクチュアルなトピックであり、「小日本主義」の問題とも関わってこよう。ないものねだりとなってしまいが、この再評価に関する筆者の具体的見解をぜひ聞いてみたかった。

（新潟大学准教授）